

予期せぬことがいっぱい —中国での映像取材—

塚田 誠之 (つかだ しげゆき)
本館先端人類科学研究部

地球を
集める



ミャオ族の闘牛大会

映像取材をおこなうときには、対象に関する一定程度の予備知識が必要だ。ただし、予測しにくい場合も多々あり、計画を立ててもそのとおりに運ぶとは限らない。これまで筆者が映像取材に携わった回数はそれほど多くはないが、そのなかから若干の経験談を披露しよう。

予測しにくい例として二〇〇六年一月にミャオ族の正月行事の取材をしたときのことを挙げよう。貴州省東南部の黔東南ミャオ族トン族自治州の雷山県では旧暦の一〇月中旬に正月「苗年」を過ごし、その活動の一環として闘牛大会をおこなう。それは農民が主催するもので、自然の河原を利用した闘牛場を舞台に耕作用の水牛が二頭、角を合わせて戦う勇壮な行事である。片方の牛が逃げればその時点でもう一頭の牛の勝ちである。勝負がつくまで試合は終わらない。

我々は当地では有名な強い牛を取材の対象としたが、その牛が属する組はのべ七〇頭が参加した。優勝賞金は一万八〇〇円で、以下八等まで賞金が出る。また街の電気店がスポンサーとなつて優勝者に冷蔵庫、二等にはカラーテレビと農民にとっては魅力的な賞品がそろえられた。簡素な観覧席が設けられたが、数千人もの観衆の多くは柵のない河原や川の対岸の土手に思い思いに陣取り、観

戦していた。河原の観衆は闘牛から目をそらすことができない。というのはいつ牛が自分のいるところに突進してくるのか予測がつかないからである。「群衆なだれ」もこわい。

我々はおもに河原で取材し、たいへん迫力のある映像を撮ることができた。しかし、取材の対象とした牛が勝ち残りかどうかが心配であった。できるだけ多く勝ってくれば迫力ある激闘シーンを存分に撮影することができるのだが、その牛は年をとって峠を越した感があり、しかも相手は強豪そろいである。我々の心配をよそに、その牛はさいわい順調に勝ち上がって優勝したが、なにぶん相手は牛のことで予測がつかなかった。

変わりゆく行事、不測の天候

次に、二〇〇四年九月にチワン族の中秋節の取材をおこなったときのことを挙げよう。広西西部の靖西県の県庁所在地の街での中秋節は、竹ひこでウサギのかたしを作り、その上から紙を貼り、夜に火をともした口ウソクをなかに立てて子どもたちが曳く。この灯籠は車輪付きだ。また、サボンに線香を挿して点火し竿先に付けて夜空に高く掲げる。この活動は今では当地に特徴的なものになっている。一九九八年に調査をおこなったことがある。そのときは、サボン灯は、

できなかつたのは残念であった。

礼儀と仕事との兼ね合い

予測がつきにくいことではないが、撮影班は現地の人々の習慣に慣れる必要がある。食べ物もやはり。広西西部の民族地域では名物料理のひとつとしてソウギョの刺身がある。酢やシヨウガ、塩の入ったタレに漬けて軽くしめ、多くの薬味を使う。しかし寄生虫の心配があるので、我々は刺身をできるだけタレに長く漬けてから、焼酎と一緒に飲み下して消毒するようにした。筆者は何回かこの料理を味わう機会があつたが今のところ無事なようだ。

また、モチ米の醸造酒も貴州や広西の民族地域の名物である。しかし、たいへん口あたりがよいので、ついつい飲みすぎる。飲みすぎれば足をとられてしまつ。我々取材班もそうした経験をした。ミャオ族の場合、家に入るときにまず三杯、ついで乾杯にも三杯：となるので飲みすぎるほうが普通なのだが、人々の心づくしのもてなしに対する礼儀と撮影の仕事との兼ね合いは結構難しい。

筆者の経験はまだまだ不十分だが、こうした経験を通じて、映像を作り、発信することの喜びを少しずつ感じはじめていく。

多くの見物客が見守るなか
河原でおこなわれる闘牛大会



多くの観光客が訪れ、
大観光スポットになっている龍脊(りゅうせき)の棚田



ザボン灯に挿した線香に点火



ウサギのかたちをした灯籠を曳く子ども



一束一〇本の線香を二〇束以上も工夫をして一個のザボンに挿したもので、点火するときには家人が総出でした。そのザボン灯が夜空に高く掲げられた光景は幻想的でじつに美しいものであつた。しかし六年後の取材のときには、精巧なザボン灯を作る老人たちが少なくなり、ザボン灯のほとんどが線香を数本挿しただけの簡単なものになってしまった。また、昔は古い街並みで家ごとにテーブルを屋外に出して、その上に月への供物を並べて口ウソクに点火し、たいへん風情があつたが、後に平屋の多くがビルに変わり、人々はビルの屋上のテラスで月をまつるようになった。くわえて広い街路や派手なネオンも増えた。かくて祭りが醸し出す風情が薄れた。

このほか自然の景観を撮影する場合も予測がつきにくかつた。広西西部の龍脊の龍脊地方の棚田の取材のときのことである。高低差五〇〇メートルにもおよぶ壮観な棚田が広がる現地は、秋の収穫期になると稲穂が実り、山全体が黄金色に染まると言われていた。そこで秋に映像取材に行ったのだが、たまたまその年は早害に見舞われて稲の成長が遅れ、九月中旬になつても稲はまだ青々としていた。見込みがはずれたが、農民の副業である豆腐作りや焼酎作りの場面などを取材した。民族のモノ作りの伝統技術は貴重な記録だが、黄金色の棚田を撮ることが